

全ての展示、触れて学ぶ

全国から視覚障害者が訪れる博物館が、盛岡市にある。全ての展示物に直接触れて鑑賞し、学びにつなげる「手でみる博物館」だ。想像するだけの世界から、一歩でも外へ誘い出したい。館長の川又若菜さん(43)は「視覚障害者の方が何度訪れても新たな発見がある場所を目指したい」と力を込める。

ライオン、サメ、クジャク…。動き出しそうな動物の剥製がずらりと並ぶ。川又さんの実家2階に設けられた、広さ165平方メートルの展示室。通常の博物館とは異なり、来館者の興味に合わせて展示物を選び、川又さん自ら説明する「オーダーメイド」が特徴だ。完全予約制で、1日2組の対応が限度。それでも年間約450人の来館者を数える。



「手でみる博物館」の剥製について説明する川又若菜さん＝5月、盛岡市

盛岡 視覚障害者に寄り添う博物館

ど、ニーズに寄り添う姿勢も好評の理由だ。

開館は1981年。県立盲学校(当時)の教諭を務めていた全盲の故松井政太郎さんが「視覚障害者の学ぶ意欲に応えたい」と発案した。標本や模型の大半を私費で集めたり、作ったりし、触れる展示品として公開。収蔵品は約3千点になった。しかし松井さんが体調を崩し、2010年にいったん閉館。川又さんは当時東京で事務の仕事をしていて、11年、松井さんから館長を引き継ぎ、現在の場所に移転オープンした。来館者の大半は60～80代の高齢者。対話を重ねる中で、知識は豊富でも実物に接しなことがない人が多いことに気付いた。

ラッコの剥製を触って「ずっと魚類だと思っていて。足があるなんて」と驚く人。スパーでパック詰めされた魚がそのままでの姿勢で泳いでいると信じていた人も。そこで、展示に工夫を凝らすことにした。タヌキとキツネの剥製は隣り合わせにし、同じ縮尺のゾウとキリンの模型も近くに並べる。触って比べることで、実物を正確に捉えてもらう狙いだ。「博物館で知ったことを、自分の言葉で人に説明できるぐらいまで深く理解してほしい」。

博物館の住所は盛岡市東中野五輪7の1。日曜定休。問い合わせは同館、電話019(624)1133。同館によると、来館者は視覚障害者とその支援者、教育・福祉関係者に限定。

▲ 9月1日 福島民友新聞掲載

川又さんが「手でみる博物館」を2011年に移転オープンしたのは、どのようなことからですか？

この博物館には、どのような特長があり、展示にはどんな工夫をしていますか？

この博物館には、どんなテーマを掲げているか、調べてみましょう。そのテーマや本体記事の内容を踏まえ、あなたの感じたことをまとめてみましょう。